

JCMA 支部報告

我が社のオリンピックイヤー

万六建設(株)



1. はじめに

この度、弊社従業員佐々木兄弟（将汰、翼）の2人が、リオデジャネイロオリンピック、カヌースラローム男子カナディアンペア競技の出場権を獲得し、万六建設(株)が10名の応援チームを結成して8月6～14日の日程で、ブラジルリオ五輪の現地応援に行ってきた。

リオデジャネイロオリンピックの出場権を獲得するまでの経緯、秋田県仙北市田沢湖からリオデジャネイロまでの移動、リオデジャネイロでの応援等を報告する。

2. リオ五輪出場決定までの経緯

5年前の春、仕事をしながらカヌーをやりたいという若者が入社した。リオ五輪カヌー選手佐々木兄弟で、兄の将汰だ。挨拶がしっかりしていて礼儀正しく、とても落ち着いている、という印象だった。地元田沢湖の玉川本流と、生保内川が合流する地点にあるカヌーコースで練習しているとのことだった。かつてJCMA東北支部たより161号（2011年）に掲載した【クニマスと国難】の中で、「生保内ウエーブ」として取り上げた場所である。

彼の最初の仕事は、田沢湖高原にある自社保養所の掃除だった。たった1人で掃除機を使ったり、雑巾がけをしたり、黙々と作業していたのを思い出す。今思えばオリンピックという高い目標があるから何事にも

一生懸命頑張れたんだと思う。夏は建設機械オペレータの手元、冬になれば除雪機械の助手等よくこなしていた。1月の除雪最盛期に、「オーストラリアに遠征がありますのでよろしくお願い致します」とお願いされた。普段一生懸命仕事している姿を思えば、「ああいいよ!」と素直に言ってしまう。常にベストを尽くしている彼等の姿、そして高い目標にひた向きに頑張っている姿とがラップし、「行って来い、ガンバレな」とエールも送りたくなる。

4年前のロンドン五輪は叶わなかった。しかし今回で、この種目はオリンピック種目としては最後、東京五輪では無くなる競技だ。小学生からカヌーを始め、兄弟ペアで五輪に出るのが夢だったと聞いていた。世界に向け着実に成長し、2014年国内ナンバーワン、世界選手権には4度出場し、2015 U-23（23歳以下）の世界選手権は4位となった。昨年から、オリンピック出場候補として、国立スポーツ科学センターで専門的な筋力強化、メンタル強化、テクニック向上に取り組んでいた。2015年9月の世界選手権で8位以内であればその時点でリオオリンピック出場権は決定だったが、それを逃がし、2016年4月23～24日の富山で行われたアジア選手権が、アジア大陸出場枠1チームを決定する、ラストチャンスであった。富山でのアジア選手権大会では、何が何でも勝たなくてはならない。万六建設(株)として応援団を編成し、富山の井田川カヌー会場へ行く計画をたてた。

ここでちょっとだけ「カヌースラロームカナディアン」の概要と簡単な「ルール」を解説する。

スラロームカナディアンは、シングルブレードパドルで漕ぐカナディアンカヌーを使用し、流れのある河川のコースを1艇ずつスタートして、定められたゲートを通りながらタイムを競う競技である。クルーの数によりシングル（1人）／ペア（2人）の区別がある。

- ・競技コースは、250～400m。
- ・コース上には、2本のポールで出来たゲート（旗門）が18～25個ある。
- ・ゲートは通過順序が決められている。
- ・ゲートには、上流から通過するダウンゲート（緑白

ポール), 下流側から上流側に通過するアップゲート(赤白ポール)がある。

- ・勝敗は、スタートからゴールまでの所要タイムと、各ゲートを通過する際のペナルティタイムによって決定する。
- ・ゲートのポールに体や船体、パドルが触れると、1回あたり2秒のペナルティタイムを追加される。
- ・ゲートを通過せずにゴールすると、ゲート1つにつき、50秒のペナルティタイムが追加される。決められた方向以外に通過した場合も不通過となる。

カナディアンカヌーとは

- ・全長3.5m以上、全幅0.6m以上の艇を使用する。
- ・漕者が進行方向に向かって立膝もしくは正座の姿勢をとり、片方にブレードのついたシングルブレードパドルで左右どちらか片方のみを漕ぎながら前に進む。

以上がルールとカナディアンカヌーの概略である。

「Rioへのキップ、富山でつかめ!」を合言葉に、平成28年4月23～24日のアジア大陸最終予選に向け、ポスターを製作し、会社の周りに掲示した。これで応援体制も整い、社内のカヌー機運も最高のボルテージに達した。



応援ポスター

23日の予選は、強豪中国が1位で96.51秒、佐々木兄弟が96.78秒で2位通過、トータルポイントの差は0.27秒だった。タイムは佐々木兄弟が1.73秒速かったが、旗門に触れペナルティ2が加算され0.27秒の僅差である。

24日の準決勝は、佐々木兄弟 97.20秒、中国 97.54秒で1位通過、トータルポイントの差0.34秒、タイムは佐々木兄弟が2.34秒速く、旗門触れでペナルティタイム2秒が加算されても、1位を保つことができた。

午後からの決勝は10チームで争われ大変なレースとなった。決勝は、トータルポイントが悪い順でスタートする。従って佐々木兄弟は最後のスタートだった。スコアボードには強豪中国チームのスコア98.71秒で

1位、2位も中国99.10秒と続いている。佐々木兄弟が最終でスタートすると同時に、万六建設(株)応援団24名は渾身の声を張り上げ「go up go up・go up go up」を繰り返した。

その応援は、井田川のカヌー会場を圧倒したかに思えるほどだった。わがチームは見事96.71秒の好タイムでゴール、その瞬間カヌー会場は大きくどよめいた。「決まった、決まった」これでリオが決まった。準備した「RIO! オリンピック出場おめでとう!」の大横断幕を全員で半分広げた時だった。旗門に触れ、スコア98.71秒とスコアボードに表示され、中国の1位と同スコアで、1位が2チーム表示された。その瞬間我々はイヤーな空気に包まれたのと同時に、先ほど半分広げた横断幕を無言で片付けなくてはならなかった。



横断幕

カヌー会場のどよめきがどのくらい続いたのか定かではない。はっきりしているのはリオオリンピックカヌー・スラロームアジア大陸最終予選・男子カナディアン・ペアでは1チームしかオリンピックに行けないということである。そしてついに結論が出された。佐々木兄弟が触れたとされる旗門通過のビデオ判定の結果、旗門に触れたかに見えたのは、激流の水しぶきであると判定され、ペナルティタイム2秒が無くなり、文句なしにスコア96.71秒が表示された。その瞬間、万六建設(株)佐々木兄弟はオリンピック候補選手からオリンピック選手となり、リオオリンピックに向かっての戦いが始まった。

その場で応援した皆が歓び、自分がアスリートになった気分を味わい、佐々木兄弟と全社員が一体になった気分は、現地で応援した者で無ければ体感出来ない感激的な出来事だった。

3. いざリオデジャネイロへ

4月25日以降、社内は色々な対応に追われることになった。マスコミ対応、取引業者対応、オリンピック



見事アジア代表の金メダル

出場祝賀会、リオオリンピック応援ツアー企画等、全て誰もが経験したことのないことばかり。田舎の会社組織としては実に弱体であることの露呈が否めません。早速情報統制を含め、リオオリンピック関連全てを田中専務担当で進めることを会社として決定した。

富山への応援団と同じ規模で企画するのが現実的でないのは、社員全てが納得していた。では、どの位の規模で、どこの部署から、どこの旅行会社を使っているのか、検討を急がなくてはなりません。

最初に日程、業務、費用等関係なく、リオオリンピック応援希望を全社員から募った。そして5月中旬、佐々木兄弟が出場する日程が明らかになり、準備に拍車がかかる。

男子カナディアンペア・スラローム

8月 8日 予選第1ラウンド 予選第2ラウンド

8月11日 準決勝 決勝

この日程にあわせ、決勝まで応援する予定をツアー会社に伝えた。

8月6日(土)田沢湖出発 成田空港→ドバイ経由→リオデジャネイロのルートで、リオには4日間滞在し、田沢湖到着は8月14日(日)の日程が決定した。会社としてはこの日程にあわせ、お盆休暇も入るので調整は難航したが、応援参加出来る社員10名をメドにリオ応援団とする計画を立て、5月下旬には応援団を結成できた。

8月6日、「リオデジャネイロオリンピックカヌー佐々木将汰・翼選手応援ツアー」として応援グッズ(横断幕、Tシャツ、タオル等)を準備し、ドバイ経由、リオデジャネイロ(ガレオン国際空港)に向け、成田空港から30時間あまりの空の旅を楽しんだ。実際は長くて、南極に行く次位きつく感じられた。

よく言われるが、リオは地球の真裏側で、日本真夏、

リオ真冬、飛行機の中が一番寒かった印象である。空港は蒸し暑く、バスで宿泊地コパカバーナの「ホテルミラソル」に向かう。

まもなく突然の渋滞。とそこになにやら人影が現れ、バスの窓越しに何かを持って盛んに話しかけてくる様子。高速道路上なのに危険だなと感じた。そこで現地ガイド曰く、この辺はいつも渋滞する場所で、地元の貧民がクッキーを売って生計を立てているということだった。バスの窓から手を出してクッキーを買うようなことはしないでくださいと注意喚起してくれた。この辺は、ファベラと呼ばれるスラム街で、ある意味無法地帯らしい。リオデジャネイロ或いはブラジルの治安の悪さは、オリンピックの話題と共に常に話題になっていて、現地に来た自分もまさかとは思ったが、目の前の現況にびっくり。やがて渋滞が解消され、バスが進むとまずはひと安心。犯罪率が日本の400倍と言われる現実の片鱗を、飛行機から降りて1時間位で見てしまった。この先の不安が否が応でも高まる。

ホテルに到着、コパカバーナは全てがオリンピックムードでむんむん、ブラジルのリオデジャネイロに世界中の民族が集まったと言う感じである。明日のカヌー競技場への移動の為、全員早寝。

4. ホワイトウォータースタジアムでのカヌー競技応援

ホテルから約50km離れた所にある、デオドロ地区ホワイトウォーター・スタジアムの中に、カヌー競技場がある。このカヌー競技場は、東京オリンピックのカヌーコース建設でも話題の人工コースである。

リオオリンピックの人工コースは、平地に落差を作り26,000 m^3 の水(目安として25mプール約40杯分)を基本的に循環させる。循環させる為のポンプは15 m^3 /秒のポンプが8基設置されている。

巨大な水中ポンプを使用し、この激流やよどみを変更可出来る様な構造にしていることに驚きを覚えた。佐々木兄弟は、この人工コースで十分公式練習をしたのだろうか? ヨーロッパではこういう人工コースが常識らしい。日本には未だ一つも無い。しかし我社の佐々木兄弟は、フランス、スロバキア、チェコ、オーストラリア等、ワールドカップを転戦した実績がある。「だから大丈夫だ」、佐々木兄弟を応援しに来た全員が祈るような気持ちでスタートを待つ。

予選第1ラウンドのスタート、遠目ながら幾分緊張気味に見えた。佐々木兄弟のご両親も我々のすぐ傍にいて、落ち着かない様子が伝わって来る。小学校の頃

カヌーを始め、「オリンピック選手になること」が夢と言っていた我が子が、ホワイトウォーター・スタジアムの大観衆の目の前で12時30分スタートする瞬間、何を思うのだろう。それは誰にも当然分からないが、ここにいる者には伝わる熱い何かがあった。



佐々木兄弟のご両親

予選第1ラウンドは富山の時よりカヌーのノリが良くなかったのか、結果は12チーム中10位。タイム110.04秒でペナルティー12秒、トータル122.04秒でした。鍛えたテクニックが発揮出来なかったように感じられた。

予選第2ラウンドはすぐに始まる。とにかくペナルティを無くし、佐々木兄弟らしいレースをしてほしい。



予選 第2ラウンド

体のサイズを比べれば外国人選手が上だ。そこをテクニックで切り抜けてほしい。その思いを込め大歓声にかき消されつつも「go up go up・go up go up」と精いっぱい声を張り上げた。

スコアボードを見ると、タイム113.04秒、ペナルティ6秒、トータルスコア119.04秒だった。予選第1ラウンド、予選第2ラウンドのどちらかいい方のスコアで予選順位が決まる。結果は12チーム中12位で惜しくも予選通過はならなかった。

その場ですぐに声はかけられなかったが、「よくやった！世界の12位だ」とエールを送った。その後、選手村から出てきた2人と合流、ご両親、我々応援団一



日本カヌーチームの監督、コーチ、選手。前列右から4人目が兄将汰、左から2人目が弟翼選手

同でブラジル料理のレストランに入り、これまでの労をねぎらった。

5. おわりに

56年前にブラジルの首都がブラジリアに遷都されるまで、ここリオデジャネイロが政治、経済、文化の中心で、南米大陸有数の都市であった。従って観光地は多々あったが、短い滞在期間では行ける場所が限られ、残念ながら次回の報告とさせて頂くことをご了承願う。



東北地方整備局表敬訪問

平成28年11月17日（木）には、リオオリンピック開会式時着用の白いパンツに赤いブレザー姿で、川瀧弘之東北地方整備局長を表敬訪問し、リオオリンピックの報告と、東京オリンピックへ向けての抱負・決意を誓った。

最後になりますが、佐々木兄弟を応援して頂いた本協会会員の皆様に心から感謝申し上げます。

JCMA

〔筆者紹介〕

阿部 誠（あべ まこと）
JCMA 東北支部
万六建設㈱

